

# 茶の湯文化学会会報 No.25

第25号/2000年6月10日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270  
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314

## 菊舎と茶事

上野さち子

田上菊舎（一七五三―一八二六）は、長州に生れ、その生涯の大半を旅に過した。始めは俳人として、後には、より幅の広い文人として。安永五年、二十四歳で寡婦となり、天明元年出家して、奥の細道の跡を辿ったことも、その著『手折菊』によって知られるところ。美濃・江戸での俳諧修行生活を含め、京・大坂・九州への往反もいく度か。ふるさと長府に落着いたのは六十代も終りに近かった。

旅のおおむねは孤りであるが、九州へ初めて渡ったときは、同じ美濃派の大先輩高木百茶坊が同行している。これは菊舎が頼んだわけではなく、美濃（以哉派）の宗匠大野傘狂の命によって百茶坊が九州行を決意し、菊舎がその意に添ってプロバガンダの一翼を担ったものようだ。

九州への出発は、天明六年七月、菊舎三十四歳のときだが、百茶坊は四月初めすでに赤間関に上陸して、豊浦・萩を廻り、菊舎も、弟今始と行動を共にした。その頃すでに九州行を菊舎が決意していたか否かは不明だが、前年の天明五年に書かれたものらしい菊舎宛の百茶坊書簡（妙久寺蔵）があるので掲げてみる。

（表記は読み下し文に改めた。）

（前略）貴尼御下りの節、京都家元にて茶事の賞美到され候よし、御本懐に存じ候。挨拶の即吟も御出来に御ざ候。扱、申入候は、茶事も格別の御たのしみと申しながら、それに御こり成られ候て、侘事うとく相成候ては、きのどく存候。申さば茶は自己のたのしみ、俳は世上の和を導き候大道にて御ざ候。西国にて一人なりとも風雅信の人出来候はば、祖翁への冥加、當時宗匠への功に御座候。此所御わすれ成られまじく候。貴辺益々繁栄に相成り申すべく、愚房なども又々遊杖の時節も出来申すべく候。（中略）本書にも申入候通り、何につけ角につけ、自己の御慎み肝要に存じ候。老のくり言としりつゝ、隔て無く申し進じ候。

この書簡を書いた天明五年、百茶坊の年齢は五十四歳。「老いのくり言としりつゝ」には実感があるが、この叱責、菊舎にはどうひびいたであろうか。

抑も、菊舎と茶事との縁は、彼女が江戸に滞在中の天明二・三年の交、美濃岩手の家老職伊藤宗長に師事したことに始まる。江戸においても、俳席同様、茶席に臨むことは多かったが、この書簡によれば帰路京都に立ち寄り、家元での茶事を賞美していたらしい。

『手折菊』に記される「秋冬京撰の間に風遊せし事、夢幻ともおぼへえず、実に繋がる舟のごとし」は、茶事を始めた人の、



奥深い京都の持つ深遠さに、埋没していく姿を描いている。

そのさまを洩れ聞いた兄弟子の百茶坊としては、一言なかるべからずと筆を執つたものらしいが、「茶は自己のたのしみ、俳は世上の和を導く大道」という認識は、美濃派にとって絶対のものであったとしても、菊舎がそのすべてを肯定したかどうかは疑わしい。胸中とはかく、彼女は百茶坊のすすめに

順い、小倉から佐賀へと歩を進め、美濃派大の成果は大いにあがった。菊舎が武家階層の出身であることも、またその性格の闊達であることも幸いしたと思われる。

しかし、肝心の茶事への関りを捨て去った訳ではない。寛政八年、(菊舎四十四歳)再び九州を訪れているが、その旅は一人。しかも長崎を目的地とするもので、交わった人々も儒者、僧侶、医師、通事、清人しんひとといった彼女の中国音修得に関わる。勿論、茶会の催されることも多く、彼女自身主催もしている。但し、道具は頭陀入りのものを主体とし、懸物には、旅に携行の七弦琴に短冊を挟むという自在さ。そこに生れる俳諧発句は、新たに獲得した漢詩と並び立って、菊舎文芸の幅を著しく広げてゆく。

初めに掲げた書簡の主、百茶坊は、寛政二年、六十歳の生涯を江戸で終わっていた。師の傘狂もまた寛政五年、六十七歳で幽冥界に入っている。この二人に対して菊舎は懇ろにあとを弔ったが、彼女自身の行く先は異なり、美濃からは遠い人となった。

さて、掲出の写真は「文化庚午 初夏」の年記が入った萩焼茶碗(本莊敬男氏蔵)で、表に「姿すずし昔を今に玉かしは 一字庵」

の一句が記される。文化七年、菊舎五十八

歳。六十の賀の前祝に作られたもの。専門家にきくと、「この時代、年記の入った萩焼はきわめて珍しく、筥目はこめは個性的なプロ作家のもの、坂窯は、御用窯として外部への流出はきびしく、これは三輪窯であろう」とのこと。

三輪は京の楽焼を学んでいる。大きく疵の入った胴を金繕きんじゅういした貫録と、手のひらに包み込みたくなるまるやかさ。菊舎と茶事との関わりをさまざま思わせるものがある。

(山口県立大学名誉教授)

#### 「追記」

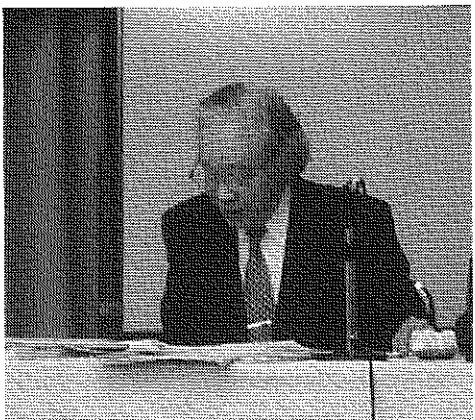
本論は、筆者と和泉書院の許可をえて「いずみ通信」25号から転載しました。なお、茶の湯関係の菊舎の著述をも収めた上野さち子編『田上菊舎全集』が十一月頃に和泉書院から刊行されることになっています。

(影山純夫)

### 第十二回研究会

平成十一年度当学会の最終行事として第十二回研究会を、東京都のプラザエフにおいて開催した。天気予報では雪が降るとのことであつたが、雪を見ることもなく、無事終える

ことができた。倉澤行洋副会長の挨拶の後、高橋忠彦理事の司会により研究発表に移り、



生田久美子氏の「茶道における「わざ」と「かたち」—関係論的知識観への示唆」、石塚修氏の「井原西鶴『日本永代蔵』「茶の十徳も一度に皆」考」、西田宏子氏「南蛮島物茶器の成立と背景」の三本の研究報告のほか、加藤榮一氏による「平戸時代の日蘭関係—商館長の江戸参府と贈答行為を中心に」と題する講演が行われた。その後懇親会も行われたが、多数の方の参加を得て盛会であつた。

各研究報告の要旨は次の通り。

#### 茶道における「わざ」と「かたち」

##### —関係論的知識観への示唆—

生田 久美子

知識とは、これまでの哲学や認知科学からは、身体ではなく心の働きであり、しかも言葉により正当化できるものとして捉えられてきた。教育活動の多くも言葉で知識を伝えることに多くの時間が割かれてきた。しかし、本来「知識」というものは「状況(世界)」の中に人間の「身体活動」とわがちがたく「埋め込まれている」存在であり、明示的な「知識」や「かたち」とはそこから意図的に切り取られた部分的なものにすぎない(cf. レイヴとヴェンガー)。また人間の「認識活動」も「心」や「頭」のなかでの独立した活動ではなく、世界との身体的な関わりの中で自らの言語的な、あるいは身体的な振る舞いをより複雑に洗練させていく活動に他ならない。ここでは「知識」と「認識」は相補的にはたらき本来的な「知識」をかたちづくることになる。

この知識観を関係論的知識観と呼ぶとすると、「かたち」を模倣し繰り返す修行を積む

ことで習熟に至ると考える芸道の修行論も、利休のカネワリを通しての修行論も、暗黙的にはあれこの新たな知識観を前提として展開していると考えられる。

この知識観は、「かたち」の意義を理論的に説き明かすものであり、学校における教育活動がこれまでのつとつてきた「知識観」の相対化を促し、新たな教育活動の展開へ向けての一つの視点を提供する。

井原西鶴『日本永代蔵』「茶の十徳も一度に皆」考—「茶の十徳」を中心として

石塚 修

西鶴の『日本永代蔵』巻四の四が「茶の十徳も一度に皆」である。茶屋を構え一度は成功した利助が悪心を起こし、茶の煮辛を他の茶に混ぜて売ったため、天罰により乱人となり、死んでなお苦しみが与えられるという話であるが、『日本永代蔵』にはこれほどその主人公の死んでいく経過を詳しく描写している章はない。利助への苛烈を極める天罰の描写の背景には、たんに道徳的な理由だけでなく、西鶴の何らかの素材に発想を得た「創作」があつたと考えられる。その素材とは、「茶の十徳」ではないか。茶の十徳は明恵上

人が作ったものとされている。諸仏加護に始まり臨終不亂で終わるが、これを頭に入れて西鶴がこれを書いたと考へざるを得ない。この茶の十徳については本文でふれられるところがない。では十徳については一般に知られていたのかというところでもなさそうである。では西鶴はこれを何で知ったかと考へると、まず残存するものはそう多くはないが十徳益があるのではないか。他に『禅林小歌注』中のものや『普齋伝集』中のもの、『茶の十徳伝』なども西鶴は知っていた可能性がある。この茶の十徳をふまえているからこそ、利助のその臨終の場面の描写に、お茶をよく知る読者も感心したのではないか。

#### 南蛮・島物茶器の成立と背景

西田 宏子

安南、宋胡録とやらんで東南アジアからもたらされた陶磁器が、南蛮と島物であるが、その定義は必ずしも明確なものではない。しかもその生産地についてもいまだ特定されているとは言い難い。ただ、国内の遺跡から南蛮に類する陶磁器が次々と発掘されており、その輸入の様相が次第に明らかにされつつある。

十六世紀は日本と中国との正式な貿易は止まっていた時期だったが、日本の中にも中国の中にも貿易を求める人達がおり、大きな物の動きはあった。例えば博多の島井家の史料を見ても、島井宗室は琉球や朝鮮半島と関係を持つており、買い付けた物を権力者に贈るとゆうようなこともしている。宗室などは島物を輸入するのによい立場にいたのだろう。

ただこういった物は初めは容器として入ってきた、中身（砂糖や水飴などではなかったか）を使った後で他に利用していたのだろう。オランダ焼などもやはり初めは容器として比較的小形の物が入ってきた、注文品を輸出するようになったが、島物も十七世紀に入って注文に応ずるようになったのではないか。島物の茶入は十七世紀になって茶会記に現れるのだし、十六世紀中に注文品を作れたか疑問である。



#### 近畿例会

第九回の近畿例会が、京大会館を会場として、年明け早々の一月七日に開催された。今回は、「茶の総合的研究に向けて」という、

冒頭の会長の挨拶にもあったように、本会創立の基盤ともいえるべき大きなテーマのもと、シンポジウム形式で報告がなされた。報告者は小泊重洋氏、谷端昭夫氏、小西茂毅氏、影山純夫氏であった。（報告順）報告の要旨は次のとおり。

#### 小泊重洋

科学技術の細分化から、逆に統合化、つまりものを全体として見ようという動きが近年出て来ている。この際「お茶」というものほど格好の素材はない。かつて守屋毅氏は「茶文化 その総合的研究」で当時の研究に、中国の茶・常民社会の茶・風俗としての茶の三点が欠けていると指摘したが、中国で茶に携わっている人はお茶をトータルで取り扱う。従って、中国の茶と関ると、お茶をトータルで取り扱うようになるのではないだろうか。一方、常民社会の茶（大衆の茶）、中でも産業としての「お茶」は今後の重要な課題になっていくものである。

#### 谷端昭夫

茶道史研究の現状を顧みると、岡倉天心の『茶の本』と、谷川徹三の『茶の美学』の二冊が道史研究の出発点であろう。しかし、文献史では相変らず千利休とその創り上げたも

の、ないしはその時代に研究が集中している。ただ近年、陶磁史・絵画史の分野において、発掘の成果や、新しい視点がでてきており、今後の研究に期待が寄せられる。しかし、点茶法についての研究が根本的に抜けている。

#### 小西茂毅

私は茶園を研究していくなかで、環境を修復する微生物を発見した。茶は、強酸性の土壌で育つものなのである。地球の酸性土壌の分布を見た時、そこには緑がないことに気がつく、緑の回復が地球規模で重要な課題となっているのである。酸性に強い土壌微生物を、酸性の強い土壌で生息させることにより、酸性化をもどす、つまり生物により土壌を修復できることがわかってきた。その中でも、バクテリアオム生物は有望で、現在も研究が続けられている。

#### 影山純夫

茶の湯と絵画という面からすると、宋・元・明・清画との関係が深いのは言ういうまでもない。ただ茶道具の絵画論については、有名な茶会記を題材としたものが再生産されてきただけである。なお近年茶会記の中の書画研究で、雪舟の作品の多さについて、茶の湯

からの視点も提示されるようになった。また思想的研究としては、「美学」という西洋的な価値観で茶の湯が語られてきたが、このような価値観の行き詰まりからか、新しい茶の湯の魅力を考える努力が行われているようだ。

#### 東京例会

第二十一回東京例会が二〇〇〇年一月二十二日午後二時から東京学芸大学で開催した。概要は次のとおりである。

#### 五山文学における茶の湯

雪村友梅の「茶寮十事」を中心として 趙 方任

五山文学の中で、茶について扱った作品は相当数あるが、茶道具を題にしたものは二十しかなく、雪村友梅（一二九〇—一三四六）の連作「茶寮十事」十首がその半ばを占める。これによって、当時の茶の体系を窺うことができるが、ここでは、次の十種の道具が描写されている。すなわち、一、茶籠（茶の湯を沸かす籠）、二、茶（所謂湯瓶）、三、茶椀（茶を挽く石磨）、四、茶合（茶の粉を入れる盒子。漆塗りである点が注目され



茶の湯を考える参考になろう。

平成十二年五月十三日（土）午後四時半より池坊短期大学第二会議室において第一回の理事会を開催した。出席理事は十四名。中村昌生会長の挨拶の後、以下の議題について審議した。

- 一、平成十一年度事業報告
- 二、平成十一年度決算報告
- 三、平成十二年度事業案
- 四、平成十二年度予算案
- 五、高知例会発足の提案について

まず、総会、大会、研究会、例会、会報、会誌の各担当理事より平成十一年度の事業報告があった。

次に赤沼理事より決算報告書に基づいて報告があった後、会員減少と会費未納のため収入が減ってきており、平成十一年度は赤字決算となっているので、今後収入を増やすために会費を値上げするか、会誌製作費を減額するとか何か対策を考えていただきたいと提案があった。

平成12年度予算案については、赤沼理事より予算案の数字を読み上げて説明があり、例会の経費や会のあり方、製作費の見直しについて今後検討していくことが確認され承認された。

高知例会の計画案については、高知県在住の永吉氏から提出された高知例会計画案について、倉澤副会長より簡単な経緯が説明され、このような地方の声に今後どう応えていくのか考えなければならぬとか、東京例会、近畿例会とは別のものとして位置づけた方がよいのではないか、という意見が出されたが、今回の高知例会については倉澤副会長に相談役になっていただき、今後のことを判

断してもらったことになった。

その他、会費値上げ及び会費の安い学生会員の新設について話し合われた。値上げして事業を現状維持するのか、会費をそのままに事業を見直すのかはつきりさせた方がよいとか、支出を減らせる可能性として会誌製作費をもう少し安くするように編集委員会で検討するとか、値上げする場合は新しい行事等の提案をいっしょにする必要があるといったという意見が出され、次回への検討事項として各自案を考えることになった。

ホームページについて岩崎幹事より5月始めにホームページを開設した旨の説明があり、今後は研究会、例会等の案内を随時載せて、会員獲得の積極的勧誘を行いたいと説明があった。

神津幹事から提出された辞職願が承認され、後任幹事については、次回理事会にて検討することにした。また、会務担当の岩崎幹事に大会・研究会担当も兼務してもらうことになった。

その他、静岡県で開催される二〇〇一年世界お茶まつりの実行委員会の報告が倉澤副会長からなされた。また、前回理事会からの検討事項であった、非会員への会誌販売につい

ては価格をいくらにするのかももう少し検討することになった。

当学会が日本学術会議の登録学術団体に承認され、学術会議の会員候補者と推薦人等を推薦したこと、日本学術協力財団へ加入したこと、この報告があった。



東京例会

次に日程で開催します。会場は東京芸術大学(上野)です。ふるってご参加下さい。なお会場が今回から変わりましたのでご注意ください。

○六月二十四日(土)午後一時  
「堀内門人帳と伊勢の茶の湯」

藤田 慶子氏  
「松阪の三大家、小津・長谷川・長井など」

戸田 勝久氏  
○七月二十二日(土)午後一時

「名物裂研究の問題点」 竹内 順一氏  
「『珠光緞子』松屋肩衝茶入仕履について」 吉岡 明美氏

近畿例会

次の日程で開催します。会場は池坊短期大学第一会議室です。

○七月二十一日(金)午後六時半～八時半  
シンポジウム「茶の空間」

発表者 野口 企由氏  
桐浴 邦夫氏  
岩崎 正弥氏

高知例会

新たに高知で例会を行います(第一回理事会報告参照)。会場はJ.R土佐荘(高知市)です。

○六月十八日(日)午前十時  
「これからの茶の湯」 柏井 武氏

ホームページについて

当学会のホームページのアドレスは  
http://www2.ocn.ne.jp/~chanoyu  
です。(チルダー)はshiftキーをおしながら、キーを押すと出るようです。アクセスをお願いします。次にホームページの一部をお目にかけます。

茶の湯文化学会

●趣意書

日本人が六百年にわたって培ってきた茶の湯は、世界に類例をみない生活文化として、精緻にして独自の構造をもち、しかも実に多彩な美を創造してきた。

その結果、茶の湯は日本文化に対して、美術や工芸はもちろん、建築、デザイン、哲学、宗教、文学など、さまざまなジャンルにおいて影響を与えてきたことが注目されてきた。そればかりでなく、近年では、茶の湯の持つ「もてなしの文化」という側面にたいして精神療法や社会科学の方面からも研究のアプローチが試みられている。

このような多くの分野からの茶の湯に対するあついまなざしのなかで、茶の湯の美と心が包含する無限の可能性を自由に解き明かし、さらなる文化の展開を求めたいという要請は、日本のみならず、世界中からも生まれてきているといえよう。

しかしながら、茶の湯に対するかえきれぬほどの多角的な要請に応えるのに、茶の湯研究の現状は、いまだ総合的な学会さえもつに至らない。個々の茶の湯研究の分野では高い水準にあるとはいえ、総合性において不十分であったことは否めない。

今ここに茶の湯文化学会を設立しようとする目的は、こうした要請に答え、幅広く総合かつ学術的に茶の湯文化を研究し、21世紀に向けて茶の湯の多様な可能性をより深く、より豊かに提示していくところにある。学会の設立の趣意を諒とせられ、専門研究者はもちろん、専門家ならずとも茶の湯に学問的関心をもつあらゆるジャンルの方々の参加を求めたい。

●入会のご案内

茶の湯文化学会は、只今のところ会員の資格制限をしておりませんが、年会費を納めることにより、どなたでも入会できます。

会員は本会主催の各種行事にご参加いただくとともに、会報(年4回)、会誌(年1回)をお送りします。なお、現在催されている本会行事には次のようなものがあります。

- 総会(毎年春に1回)
- 大会(毎年秋に1回)
- 研究会(毎年2回)

茶の湯文化学会会報 No.24

第24号/2000年3月23日発行

●寄稿:「北限の茶園」梶原茂克悦

●報告:平成11年度大会

- 茶会
- 記念講演「遠州の数寄」小堀 宗慶
- 研究発表  
・愛知県尾張地方で消費される抹茶について 坪内 淳仁  
・「易経と茶」張 建立  
・「調理からみた茶」南 廣子  
・「江岑宗左茶書における興善院について」山口 務  
・「古染付の詩文磁についての一考察」葉 文秀  
・「茶の科学研究と茶学に向けての私見」小西茂毅

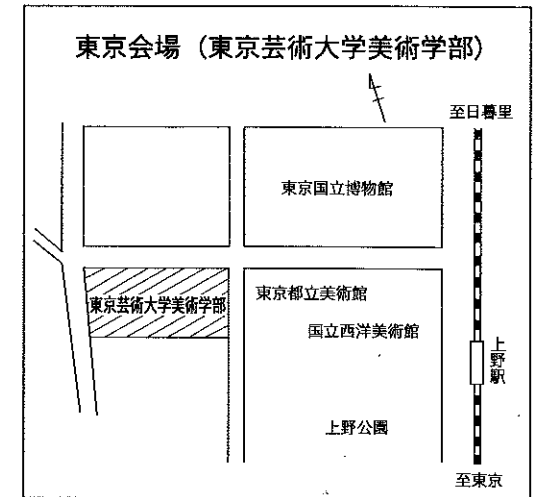
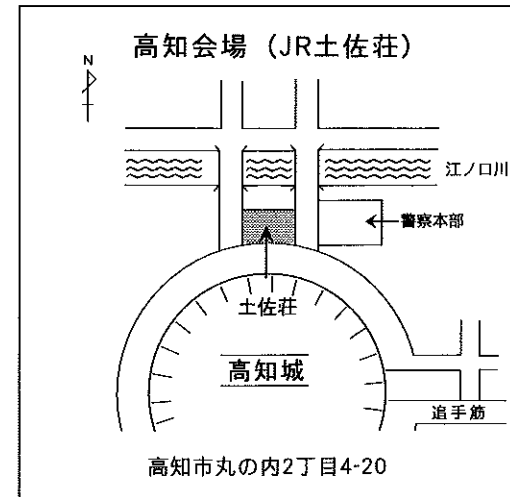
○シンポジウム「小堀遠州」

小堀 宗慶、中村 昌生、林屋 晴三、熊倉 功夫、倉澤 行洋

●お知らせ 米村孝月

●訂正

●後記



## 後記

\*会報二十五号をお届けします。五月中に発行したいと思っておりましたが、諸般の事情により六月にずれ込んでしまいました。例会のお知らせは会報だけによるため、これにより発行が左右されることにもなりません。

\*いよいよ二十世紀最後の年度が始まりました。当学会でもホームページを開設し、日本学術会議の登録団体としても認められたいと、明るい話題が多いのですが、運営はなかなか難しく、問題も山積みです。会員の皆様のご支援をお願いいたします。

\*前号でもお知らせしましたが、当学会にも電子メールが通じています。アドレスは

chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

です。かなりの文章が送れますので、電子メールで会報に投稿いただいても結構です。お待ちしております。